

岡谷市

夢&再生プラン 2007

“虹と緑” の政策提言集



信州みどりの党 代表 藤森 弘 編著



<岡谷事務所>

〒394-0027 岡谷市中央町1-9-9

TEL 090 (3566) 6086

<http://gcp7.net> fujimori@gcp7.net



岡谷市長地在任

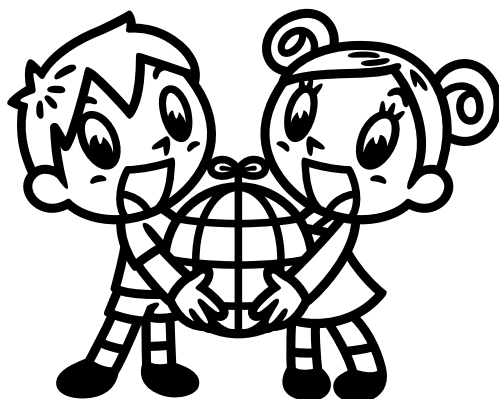
「夢を語り合うこと」から始めよう！

みなさん、こんにちは！

「信州みどりの党」の発起人代表の藤森 弘です。

前は「岡谷市政の現状と課題」と題して、岡谷市の少子高齢化や生産人口の減少がもたらした社会構造の変化について詳しく説明しました。また、“負のスパイラル（＝悪循環）”から脱却するために“人の和”こそが肝要であると強調しましたね。

万一まだ読んでいない方がいらっしゃいましたらホームページを御覧ください。インターネットビデオ（WebTV）形式とプリント（PDF）形式で御覧いただけます。自身のプロフィールも詳しく紹介しています。



<http://gcp7.net>

さて今日は、「みんなで作るマニフェスト運動」で寄せられた皆さんの施策や提言を縦糸とし、私たちの考えを横糸として、両者を織り込むかたちで再構成して、どうしたら“負のスパイラル”から脱却できるのか、その具体的な政策と処方せんについて考えてみましょう。

以下に掲げる政策提言は、単なる“思いつき”でしかない荒削りな部分もあります。予算や財源の裏付けがなく、さまざまな法的な縛りを無視した夢物語に過ぎない部分もあるかもしれません。

しかし、岡谷市再生への第一歩は、「夢を語り合うこと」から始めるのが一番良いと私たちは考えます。「できない理由」を探すのではなく、「どうしたら実現できるのか」を共に考えましょう。夢を現実化する意志の営みこそが本来あるべき“政治のかたち”なのですから…。

寄せられた意見や提言には、岡谷市を心から愛する気持ちや「何とかしなければ」という切羽詰まった思いが込められており、私たちにはとても貴重に感じました。この場を借りて感謝します。

こうした庶民の声に虚心に耳を傾け、予算を付けて具体的なプランに練り上げるのがプロの行政マンです。岡谷市には優秀な職員がたくさんいますから大丈夫でしょう。私もプロのファイナンシャル・プランニング技能士の端くれとして、できる限り実現可能なマネージメントを実践したいと念じています。

定住人口 6 万人 & 交流人口 倍増計画

さて、現在の岡谷市政の最大の課題が「人口減少をいかにして食い止めるか」であることを前回強調しました。特に生産人口の減少が自主財源の不足を招く事態に直面しており、税収源となる屋台骨を再構築しなければ福祉の充実も望めない苦しい状況にあるからです。

生産の担い手である中堅層の U ターン（岡谷出身者の帰郷）や I ターン（他地域からの移住）促進による定住人口の増加対策が必要不可欠ですが、そのためにはまず働く場を確保しなければなりません。

“負のスパイラル（=悪循環）”を断ち切るための鍵は、事業所の誘致の成否にかかっていると云っても過言ではありません。

天竜テクノバレー&リゾート・オフィス構想

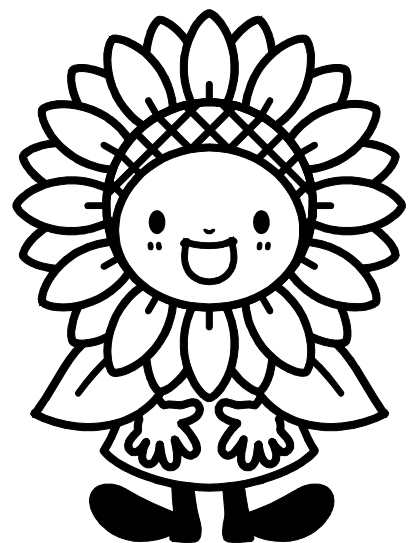
どこにどんな企業を誘致するのが問題ですが、新市立病院の建設地が旧市民会館跡地に決まったことで、JR 岡谷駅周辺を含めた天竜川流域をテクノバレー（工業団地）とする構想を私たちは提案したいと思います。

事業所を誘致するためには、「受け皿」がなくてはなりません。ところが岡谷市内には事業所向けのテナント物件が絶対的に不足しています。そこで駅裏の敷地に複合商業施設（後述）を兼ね備えた市営のテナントビルの建設をしたらどうでしょうか。

まず、地下 2 層の平面大駐車場を用意します。地下駐車場ですから雨が降っても雪が降っても大丈夫ですね。そして 1～2 階を複合商業施設とし、3～8 階を事業所向けのテナントとする案です。

私の母校である慶應義塾大学の出身者でつくる三田会（財界に強力なコネクションが存在…）という組織がありますが、いつも話題になるのが都心のオフィスの地代・家賃の高さです。

特に若手の経営者にとってはオフィス賃料の高さが経営を圧迫しており、「賃料の安い地方都市に移りたい」という話を良く耳にします。インターネットの普及による通信網や高速交通網が発達した現在では、会社の立地条件は東京でも信州でも大差ないようです。



こうした潜在的ニーズを見逃す手はありません。条件の良い「受け皿」さえ用意されれば、岡谷市に来てくれる新興企業は多いと私たちは見えています。

パソコンや携帯電話向けのソフトウェア、アニメーション製作、ナノテク（超微細加工技術）、医療機器…など、比較的広い工業用地を必要としない中規模の新興企業群の誘致に力を注ぐと良い気がします。

また、東京や大阪、名古屋など大都市在住の大学の同期生と話をする、都会の喧騒に疲れた心身を癒すために、緑の濃い別荘のようなリゾート・オフィス（会社の分室）があると良いという声も耳にします。

ストレス性疾患に悩む現代人にとって「癒しの場」は重要です。緑と湖に囲まれ、温泉施設まである岡谷市は理想的だね、と友人は言います。やまびこ公園周辺はこうしたニーズにこたえる基礎条件を備えた立地だと言えるのではないのでしょうか。

クリーンエネルギー供給基地化構想

化石燃料（石油や石炭）の大量使用によって、地下に眠っていた炭素が二酸化炭素となって大気中に放出されたことが地球温暖化の原因であることは良く知られています。二酸化炭素を吸収して酸素を供給する“みどり”を大切にしなければならないことは前回お伝えしました。

しかし、中国、インド、ロシア、ブラジルなど新興諸国（BRICs）が大量の石油を使い出した今、“みどり”を大切にすることはとても追いつきません。地球環境の保全のためには石油に代わる新しい代替エネルギー供給源の確保が必要不可欠です。

埋蔵地下資源は有限であり、石油に依存したエネルギー供給の持続性に限界が見え始めているのも事実です。21世紀は、遠からず石油代替エネルギーの必要性に迫られることは間違いないでしょう。

一方、放射性汚染の心配がある原子力に依存することもできません。クリーンエネルギーの地産地消を推進する必要があります。

そうした観点から見直すと、岡谷市は世界に誇れる「クリーンエネルギー供給基地」となり得る可能性の宝庫だということに気づきます。



岡谷市が高度な精密技術を持ち、知識集約型産業が発達していることは周知の通りです。前述したナノテク（超微細加工技術）を生かした主要分野として、光から電気へのエネルギー変換効率を飛躍的に高めるであろう新型太陽電池の研究が進んでいることをご存知でしょうか。

また、新しい自動車の動力源として「燃料電池」の研究も急ピッチで進んでいます。「水素」と「酸素」を化学反応させて発電し、排出物は「水」だけという環境にやさしい新技術です。まだ高価ですが既に一部で実用化され始めていますね。

こうした次世代（NEXT）産業の最先端技術を担う力量が岡谷市にはあるのです。「製糸」で外貨を稼いで日本の近代化を支え、「精密」で戦後の高度経済成長を支えた岡谷市の進取の気質を忘れないで下さい。

「クリーンエネルギー製造装置」で21世紀の地球を救う新産業を岡谷に創出したい、と私たちは考えている次第です。

また、天竜川へのマイクロ水流発電機の設置、公共施設の屋上に太陽光と風力のハイブリッド発電機を設置するなど、自然エネルギーを使ったクリーンエネルギーの地産池消も推進してしかるべきでしょう。

岡谷市には「天の時」と「地の利」があります。足りないのは「人の和」だけなのです。

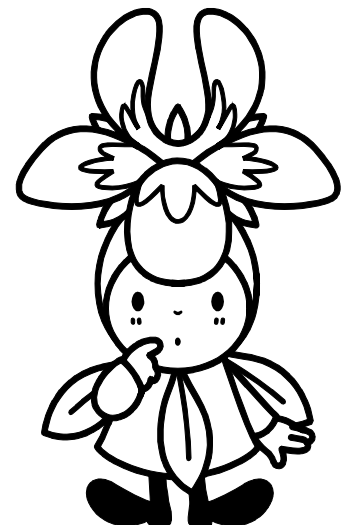
地域活性化のポイントは「交流人口」

こうした産業振興を通じて若者の働く場を確保し、岡谷市の「定住人口6万人回復」を目標にしたいと私たちは考えていますが、実は地域活性化のポイントは、「定住人口」よりも「交流人口」にあることを知る人は少ないと思います。

「交流人口」とは、岡谷市には住んでいないものの、観光で岡谷市を訪れたり、岡谷市の物産品を買ってくれる人々のことです。街のにぎわいや活力を生み出すのは、実はそこに住んでいる人々よりも外部から訪れる人々なのです。

要するに、「お客様」が多いかどうか重要だという意味ですね。このことは商業の活性化とも密接に関係しています。

日本エコ・ツーリズム協会の会員である私の目には、岡谷市には「エコ・ツアー」や「リフレッシュ・ツアー」や「森林浴ツアー」にうってつけの素晴らしい観光資源が数多くあると映ります。にもかかわらず、それが有効活用されていないことが残念でなりません。



「シルキー観光バス」の導入と「岡谷太鼓会館」の建設

そこで、「シルキー観光バス」の導入と「岡谷太鼓会館」の建設を提案したいと思います。「岡谷太鼓会館」は、観光と伝統文化の継承拠点を兼ね備えた「佐渡おけさ会館」のようなイメージです。

例えば、夏場はこんな観光ルートを作ってはどうか。移動手段は市営の「シルキー観光バス」です。心身の疲れを癒し、大自然の懐で遊び、ふるさとの太鼓の音色に酔いしれる人気ツアーになるかもしれません。

塩嶺峠の小鳥バス→ロマネットの朝風呂→山の駅の手打ちそば朝食→釜口水門の噴水見学→うなぎ弁当の昼食→横河川上流の「長命水」探訪→出早神社で休憩→太鼓会館で岡谷太鼓を堪能→栈敷席で地酒、山菜料理、川魚料理、朝取り野菜などの夕食→駅裏の複合商業施設で地場産品のショッピング…。

そこに大人には山菜取り、子供には虫取り、芋掘りや田植えなどの農作業体験を加えるのも良いかもしれません。

岡谷市は“東洋のスイス”と呼ばれたほどの観光資源の宝庫です。「緑と湖の都」の美しさを忘れてはいませんか。そこに観光資源としての価値を再発見しようではありませんか。

メールマガジン形式の「岡谷ふるさと通信」の発行

また、Uターン（岡谷出身者の帰郷）やIターン（他地域からの移住）の促進策として、メールマガジン形式の「岡谷ふるさと通信」の発行を提案したいと思います。

メールマガジンは若者層ではごく普通のコミュニケーション・ツールなのですが、ご高齢の皆様にはなじみが薄いかもかもしれませんので少々説明します。パソコンや携帯電話を使った「現代版の電子手紙」と言えば分かるでしょうか。電子ボタンを押すだけで、多数の相手に瞬時に電子手紙（メール）を送ることができます。経費は通信料だけで、それほど高くありません。

岡谷市出身者、観光客、物産品購入者のメールアドレス（住所）をデータベース化して、ふるさと岡谷市の行事や出来事を定期的に配信する訳です。

そこに市内企業の製品広告や求人広告を載せれば新たな市の収入源にもなりますね。事業所にとっても地縁・血縁に基づいた良質な顧客の囲い込みにつながりますから一挙両得です。



市外に住む「岡谷市ファン倶楽部」を形成することになりますから、UターンやIターンの動機付けや切っ掛けづくりにもなるでしょう。地道な交流人口の増加は、いつしか定住人口の増加にもつながって行くはずで。

交流人口倍増を目標とともに頑張りましょう。

「協働ショッピングモール」と「もったいない市場」構想

さて、商業の活性化という観点からは、市内の小規模個人商店が相次ぐ大型店の来襲に四苦八苦している現状があります。これを何とかしなければなりません。

マイカーの普及による交通体系の変化にともなって、駐車場不足に悩む中心市街地の地盤沈下が叫ばれて久しいにもかかわらず、商店街再生へ向けた有効な行政施策が見当たりません。商店主の高齢化と後継者不足も深刻です。

そこで、個人商店の生き残り策として、「協働ショッピングモール」の創設を提案したいと思います。

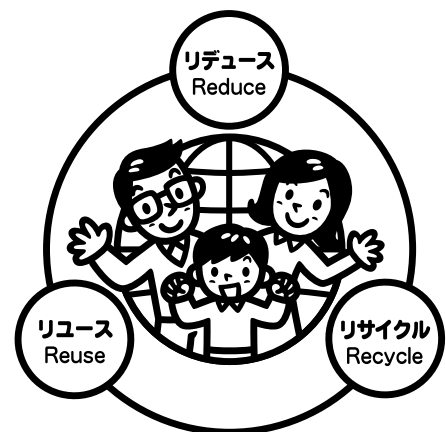
駅裏の敷地に地下大規模駐車場を持つ複合商業施設を兼ね備えた市営のテナントビルを建設したらどうかと前述しました。その1階部分を市内の個人商店の「出張営業所」として割り当て、テナント料を無料開放（光熱費など共益費、維持管理費は応分負担）するという案です。

自分の店舗でお客さんを待っていても、駐車場不足や商店街としての魅力低下で客足が遠のくばかりですから、個人商店が「協働」して郊外の大型店に対抗できる大規模ショッピングモールを作り、“出稼ぎ”できる魅力あるマーケットを作ろうという提案です。

また、昨今の省資源&省エネルギーへの関心の高まりや、リサイクル（再生利用）、リユース（再活用）、リデュース（ゴミの減量）の3R運動の推進によって、家庭で不要になった物を売買するフリーマーケットが各地で賑わいを見せています。

そこで、私たちは「もったいない市場」の創設を提案します。駅裏テナントビルの2階部分をフリーマーケットの常設市場にしようという構想です。

駅前もララ岡谷の再開発事業が始まるまでの“つなぎ”として、「協働ショッピングモール」と「もったいない市場」を2～3階部分で試行してみるのも一考でしょう。



特に、ベビー用品、子供服、玩具、絵本などはすぐに使えなくなってしまうため、再活用（リユース）のニーズが高いのではないのでしょうか。これらの新品同様の中古品を安く買うことができれば子育て支援策としても有効だと感じます。

また、各商店では売れなくなった傷物、流行遅れとなった在庫処分品、朝取り新鮮野菜、古本、中古 CD、中古ゲームソフトなどを自由に売買できるようにすれば、市場のにぎわいを生み出すことができるでしょうし、売値の10%程度を管理費として徴収すれば市の新たな財源の一助にもなるでしょう。

「治療」と「予防」のバランスを重視した新市立病院構想

さて、話題を新市立病院に移しましょう。先日、市側から建設場所の選定など新病院の骨格となる素案が示されましたが、このプランに対して私たちは基本的に大賛成しています。

前回、一人暮らし老人の世帯数が急増しており、その生活を守り、安心して暮らせるようにすることは行政の責任だと言及しましたが、高齢者に限らず新病院に対する市民の期待感は強いと感じています。

ただ、厳しい財政状況の中で建設費の多くを起債（借金）に頼らざるを得ないことや、現在の市立病院経営に毎年約2億円の税金が補てんされており、自立した病院経営にはほど遠い現実があることが少々気掛かりです。

そこで、黒字経営による自立した新市立病院とするために、幾つかのアイデアを提案したいと思います。

これまでの病院は「病気を治す」こと、つまり「治療」に力点が置かれて来ました。これは病院なのである意味では当然のことなのですが、経営面から考えると入院患者や通院患者が多くなければ黒字経営が成り立たない訳ですから、市民の「不幸」を思うとやり切れなさが残ります。

また、医療技術の高度化で必要経費が高くなるようになって来ており、治療費だけで経営を成り立たせることは至難の技になっているのが現状です。

ですから、これからの病院経営には根本的な発想の転換が必要です。病院の“もう一つの機能”として、市民を「病気にさせない」ことに軸足を置き、「予防」に力を注ぐ病院経営を目指すべきだ、と私たちは考えています。



市民が健康な生活を営むための「安心」を病院の新機能として付加してはどうか、という意味です。

具体的には、「医食同源レストラン」の設置、サプリメントや機能性食品の販売、病気の早期発見を促す健康診断サービスの充実、食事・運動・精神療法を組み合わせた健康生活アドバイス、心身のリフレッシュを図る健康マッサージなど、予防と健康の維持を市民に提供できるような病院になればいいと考えている次第です。

高齢化の進展でこうした「予防医療」は市場性が高く、病院の黒字経営にも大きく寄与するはずで。また、入院生活の質を向上させるために DVD シアター、カラオケルーム、囲碁・将棋ルーム、インターネットコーナー、図書館、和室の病棟、温泉大浴場、緑の車いす遊歩道などを併設するのも一考でしょう。

また、在宅医療や福祉の拠点として、「医食同源レストラン」で作った「健康弁当」を一人暮らし老人の世帯に宅配して、健康状態を定期的に見守ることも検討してはどうかと思います。

新市立病院には、入院や通院など市民の不幸（＝治療）に依存する経営ではなく、市民の幸福（＝予防）を重視した経営をぜひ目指してもらいたいものです。



「いったい人間の狂気とは何だ。

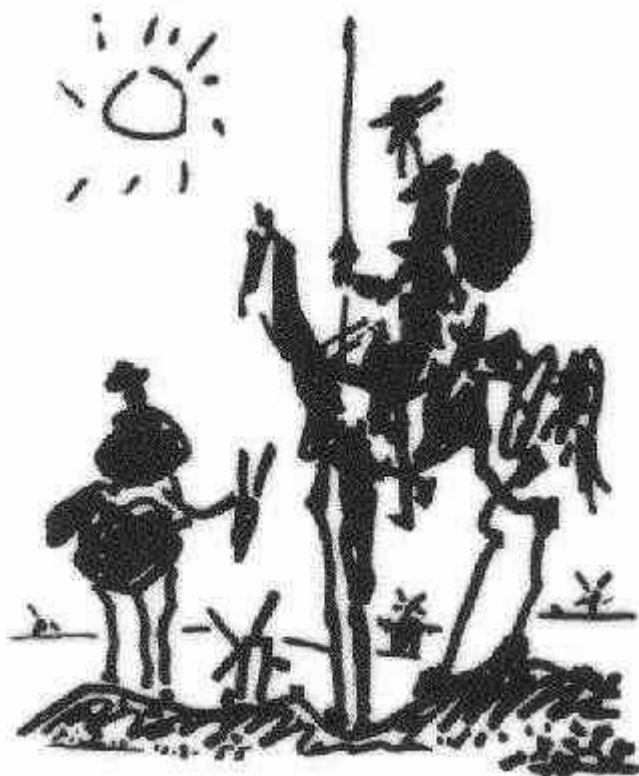
夢におぼれ、現実をかえり見ないのは狂気だろう。

逆に、現実にしがみつき、夢を見ようとしらないのも狂気なのだろう。

しかし、私はこう思う。

最も憎むべき人間の狂気とは、あるがままの姿に折り合いをつけて、
あるべき姿のための闘いを途中でやめてしまうことだ」

ミュージカル「ラマンチャの男」より



藤森 弘の略歴

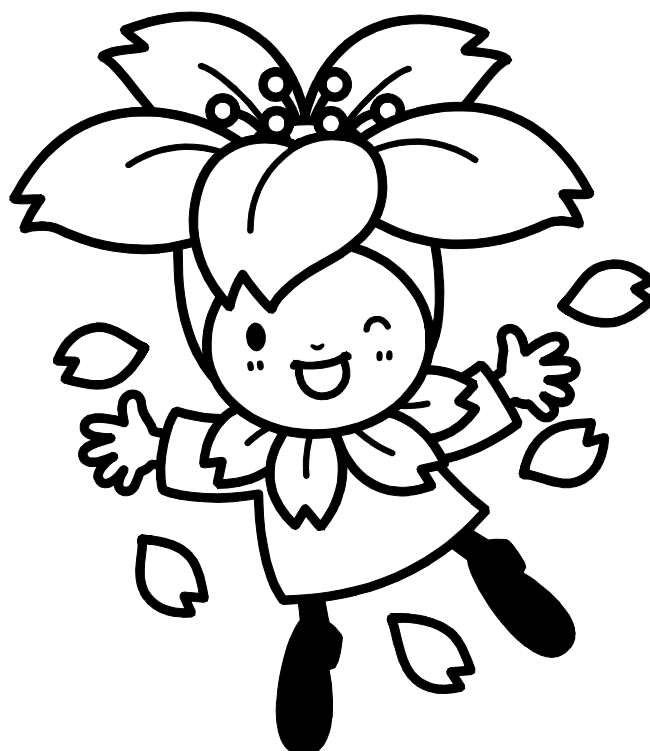
岡谷市長地生まれ。44歳。妻と長女の3人家族。長地小、岡谷東部中、諏訪清陵高、慶應義塾大学法学部政治学科卒。八十二銀行勤務、信濃毎日新聞社報道部記者を経て、学習塾経営の傍らでフリーライターとして文筆活動を続ける。

現在、総合電子情報サービスの株式会社セルフネット代表取締役社長。

ファイナンシャル・プランニング2級技能士（厚生労働省認定の国家資格）。

信州みどりの党発起人代表。日本ビオトープ協会会員。日本エコ・ツーリズム協会会員。木の文化と環境フォーラム会員。みどりネット信州会員。岡谷景観を考える会会員。岡谷九条の会会員。

<自宅> 〒394-0082
岡谷市長地御所2-9-14
TEL 0266 (26) 1417
FAX 0266 (26) 1450
携帯 090 (3566) 6086



「藤森 弘を応援する会」結成準備のお知らせ

藤森 弘の政治活動を支援する「応援団」の結成準備を進めています。

御参加いただける方は、必要事項を御記入のうえ、下記まで御連絡下さい。

氏 名			
住 所	〒		
電話番号	自宅 ()	F A X ()	
		携 帯 ()	
メールアドレス	@		
<p>恐れ入りますが、下記のアンケートにお答え下さい。</p> <p>該当する番号に○印をして下さい。(複数回答可)</p> <p>1 応援する会の幹部として積極的に支援したい。</p> <p>2 応援する会のスタッフとして事務的な支援をしたい。</p> <p>3 応援する会のメンバーとしてポスター貼りやチラシ配布などを手伝いたい。</p> <p>4 推薦人として新聞やパンフレットに名前を公表しても良い。</p> <p>5 推薦人として応援するが、名前の公表は差し控えて欲しい。</p> <p>6 ポスター貼りなどに限定したボランティア・スタッフとしての側面支援なら参加可能。</p> <p>7 その他 ()</p>			

郵便の場合.....〒394-0082 岡谷市長地御所2-9-14 藤森 弘 の自宅宛

メールの場合.....fujimori@gcp7.net

ファックスの場合.....0266-24-5688(専用回線)